

第6期中期計画に向けた PMVS の策定

—奈文研 PMVS2027—

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所



表記の凡例

P: Purpose: パーパス: 存在意義

M: Mission: ミッション: 使命

V: Vision: ヴィジョン: 理想像

S: Strategy: ストラテジー: (ヴィジョン実現のための) 戦略的事業

MVS: Mission, Vision, Strategy: ミッション、ヴィジョン、ストラテジーの総称

PMVS: Purpose, Mission, Vision, Strategy:

パーパス、ミッション、ヴィジョン、ストラテジーの総称

FwIP

: Fieldwork Innovation Project:

フィールドワーク・イノベーション プロジェクト

Sustainability: サステナビリティ: 持続可能性

Balance: バランス: 調和性

Creativity: クリエイティビティ: 創造性

Cooperation: コーポレーション: 協働性

Heritage Science: ヘリテージ・サイエンス: 遺産科学

第6期中期計画に向けた PMVS の策定

—奈文研 PMVS2027—

はじめに —創立75周年と第6期中期計画に向けた MVS の発展—

文化財・文化遺産は、高い歴史的・文化的価値をはじめ、多様な価値と機能・役割をもち、人びとが文化的に豊かな社会を構築し、維持していくうえで、かけがえのない存在です。調査研究によって文化財・文化遺産の価値を明らかにし、未来へと守り伝える方法を示すことは、持続可能でより良い社会の実現を目指す世界共通の目標「持続可能な開発目標」(SDGs)に貢献するものと言えるでしょう。

この認識のもと、奈良文化財研究所(以下「奈文研」という)は、創立70周年の2022年を機に、奈文研の**Mission**(ミッション:使命)、**Vision**(ヴィジョン:理想像)、**Strategy**(ストラテジー: (ヴィジョン実現のための) 戦略的事業) (以下、それぞれの頭文字をとり、「MVS」と総称する) からなる**奈文研 MVS2022**を策定し、それに基づき業務を行うとともに、2024年には組織改編を実施しました。

しかし、MVS2022の策定は、MVSと機構の中期目標・中期計画とをうまくリンクできるタイミングではなかったことから、ストラテジーが既存事業の継続を過分に意識するものとなっており、所員間で意見が分かれる検討課題を残していました。そのため、奈文研創立75周年を迎える2027年を見据えて議論を進め、その解決を目指すこととしました。また、MVSの共有が組織内外で必ずしも十分でなく、新たな重点事業である**フィールドワーク・イノベーション プロジェクト**をMVSに反映させる必要も出てきました。

そこで、2025年度に独立行政法人国立文化財機構が第6期中期目標・中期計画を策定し、2026年度から第6期中期目標期間が始まるというタイミングに合わせ、MVS2022をMVS2027へと発展(※)させるとともに、課題解決のための議論を進めてきました。この中で、奈文研の**Purpose**(パーパス:存在意義)を新たに示し、PMVS2027として、MVS2022で動き始めた奈文研の自己改革の歩みを加速させ、確実なものにすることとしました。

以下に、**奈文研 PMVS2027** として、奈文研は「何のために存在するのか」というパーパス、「どう行動すべきか」というミッション、奈文研創立 80 周年の 2032 年までに「どうなりたいのか」というヴィジョン、そして、その実現のために実施する戦略には、2027 年に先立ち、2026 年から推進する第 6 期中期計画（別紙 1）を充てることを掲げます。

奈文研 PMVS2027 は、単なる行動指針ではありません。私たちの決意と責任、そして実現のために全力を尽くすという覚悟の表明です。



奈文研の PMVS（Purpose, Vision, Mission, Strategy）

※「奈文研 PMVS2027」は奈文研創立 75 周年を迎える 2027 年 1 月を見据え、第 6 期中期目標期間が始まる 2026 年度 4 月から開始するものとします

1. 奈文研のパーパス：存在意義

私たちは、モノとフィールドにひたむきに向き合うことで生まれる価値と感動を一人ひとりと分かち合い、千年先へ知として伝えます。そして、みんなのよりどころとして、その最前線に立ち続けます。

みんなのために、みんなとともに。奈良文化財研究所

パーパスにある「モノ」とは、日常生活でふと目にする近所の原っぱ、そこに埋もれていた何かの破片、日ごろ見慣れた景色や建物、押入れの隅に残っていた何かの書き付け、そして、その背後にあるさまざまな人びとの営みや想いなどを広く含んでいます。

奈文研は、そんなモノが存在する場である「フィールド」に出向き、それらが何なのか？とひたむきに向き合い、モノやフィールドがもつ文化的、歴史的価値を明らかにし、日ごろなにげなく見ていたそれらの中に文化的、歴史的価値を見出した時の感動へとつなげます。そして、文化的、歴史的価値をもつモノやフィールドである文化財・文化遺産と、それらがもつ価値を未来へと伝えていくために奮闘します。

同時に、奈文研は、国内外の研究者・組織、行政、地域社会、さらには市民の一人ひとりにとって頼り、支え、集う力の「よりどころ」となり、文化財・文化遺産がもつ価値を明らかにし、将来へと確実に継承する営みの最前線に立って活動していくことを宣言します。

パーパスには、奈文研の文化財・文化遺産の研究が高い公共性・社会貢献性を持つと同時に、奈文研内の特定の部局や奈文研だけが単独で行うのではなく、多くの人びと、組織などと協働して進めるという自覚と決意を込めています。

そして、それをメッセージ「みんなのために、みんなとともに。 奈良文化財研究所」に示しました。

私たちは、この奈文研の存在理由を、単に掲げて終わることがないように常に心に置きながら、業務を遂行してまいります。

2. 奈文研のミッション：使命

パーパスに基づき、第6期中期計画のもと、奈文研は「どう行動すべきか」を以下のミッションとして示し、実行します。

奈文研は、文化財・文化遺産に関する調査研究の中核的拠点として、国内外の研究者・研究機関、行政、地域社会、市民をつなぐ結節点となります。そして、文化財・文化遺産の保護の最前線に立って、次に掲げる5つの使命を果たし、文化財・文化遺産を未来へと確実に継承します。

- DX とグローバルな研究協働による研究能力の飛躍的向上
- 最先端のフィールドワークに基づく文化財・文化遺産の学術的な価値の解明
- 次世代型の文化財・文化遺産の活用・管理ならびに調査手法の開発・普及
- 文化財・文化遺産に関する国内外の専門家養成による保護体制の充実
- 文化財・文化遺産に関わる情報基盤の充実と発信

この5つの使命は、パーパスに示す「**フィールドとモノにひたむきに向き合う**」ことであり、「**価値と感動**」を生む営みです。それは、「**みんなのよりどころとして**」内外のさまざまなところで行われている文化財・文化遺産に関わる取組を支え、より確かなものとする営みでもあります。

また、「**文化財・文化遺産に関わる情報基盤の充実と発信**」を通じて、奈文研の文化財・文化遺産の調査と研究によって生まれた「**価値と感動**」をさまざまな方法で積極的に発信し、シームレスに必要なとしている世界中の人びとの「**一人ひとりに届けます**」。

なお、第6期中期計画期間においては、後述する中核的な重点事業であるフィールドワーク・イノベーション プロジェクトを推進する中で、「**DX とグローバルな研究協働による研究能力の飛躍的向上**」を図ってまいります。

これらの5つの使命のいずれにも、パーパスにある「**みんなのために、みんなとともに。奈良文化財研究所**」という自覚と決意を込めています。

3. 奈文研のヴィジョン：理想像

奈文研は、上記したミッションの達成のために、創立 80 周年となる 2032 年までに実現を目指すヴィジョンを次のように掲げます。

○ 奈文研は、ヘリテージ・サイエンス（遺産科学）のナショナルセンターを目指します。

MVS2022 のヴィジョンでは、「**サステナビリティ（持続可能性）、バランス（調和性）、クリエイティビティ（創造性）**のキーワードのもとに、調査研究を豊かに発展させ、文化財・文化遺産を保存・活用し、次世代へと確実に継承していくために、国内外からの要請に応え得る必要不可欠な**調査研究センター**」であることを掲げていました。この主旨を継承しつつ、今回、さらに**コオペレーション（協働性）**を加え、発展させたものが「**ヘリテージ・サイエンス（遺産科学）のナショナルセンター**」です。

ヘリテージ・サイエンスとは、さまざまな研究領域・研究分野、組織を横断した総合的なアプローチを通じて、多様な文化財・文化遺産の未来への継承を目指す学際的・分野横断的な研究です。

私たちが思い描く「**ヘリテージ・サイエンスのナショナルセンター**」は、従来の人文科学、自然科学のほか、新たに社会科学なども加えた研究領域・研究分野の拡大・融合を図ります。そして、研究所内の部局、所外の組織・団体を横断する総合的なアプローチのもと、文化財・文化遺産を持続可能な形で後世へと伝えるため、文化財・文化遺産に関する高度な調査研究を推進する中核的な機関として、その役割を果たします。さらに、国内外の文化財・文化遺産に関する諸課題に対して一元的に対応し、調査研究の成果を総合的に活用して解決をはかることで、文化財・文化遺産の保存・活用に貢献します。

私たち自身も、ヘリテージ・サイエンスのナショナルセンターの職員にふさわしい文化財・文化遺産研究のプロフェッショナルとして、常に高い専門性とあふれる情熱をもって真理を探求し続けます。そして、いかなる時も誠実かつ公正な行動に心がけます。過度な専門性や偏狭な縄張り意識を排し、海外も含めた所内外の多様なパートナーと深く協働し、新しい価値を共創する精神のもと、文化財・文化遺産がもたらす豊かな未来の創造に挑戦します。私たちは、社会の要請に真摯に応え

る組織であり続けるため、常に最先端の調査研究を推進し、実績（アウトプット）のみならず、地域社会がその実績を活用し享受できる成果（アウトカム）を重視します。失敗を恐れず、新しいことに積極的に挑戦し、社会貢献に繋がる調査研究事業を通じて外部の意見に耳を傾け、常に自問自答し続けます。同時に、社会人として業務の効率化とコンプライアンスに心掛けます。

4. 奈文研のストラテジー：戦略的事業

奈文研は、以下の考えのもとに、第6期中期計画（別紙1）をストラテジーとして実行し、ヴィ

- 中核的な重点事業「フィールドワーク・イノベーション プロジェクト（FwIP）」の達成
- 第6期中期計画への反映
- 5年・10年のロードマップ策定
- サステナビリティ（持続可能性）／バランス（調和性）／クリエイティビティ（創造性）／コーポレーション（協働性）の重視

ジョンを実現します。

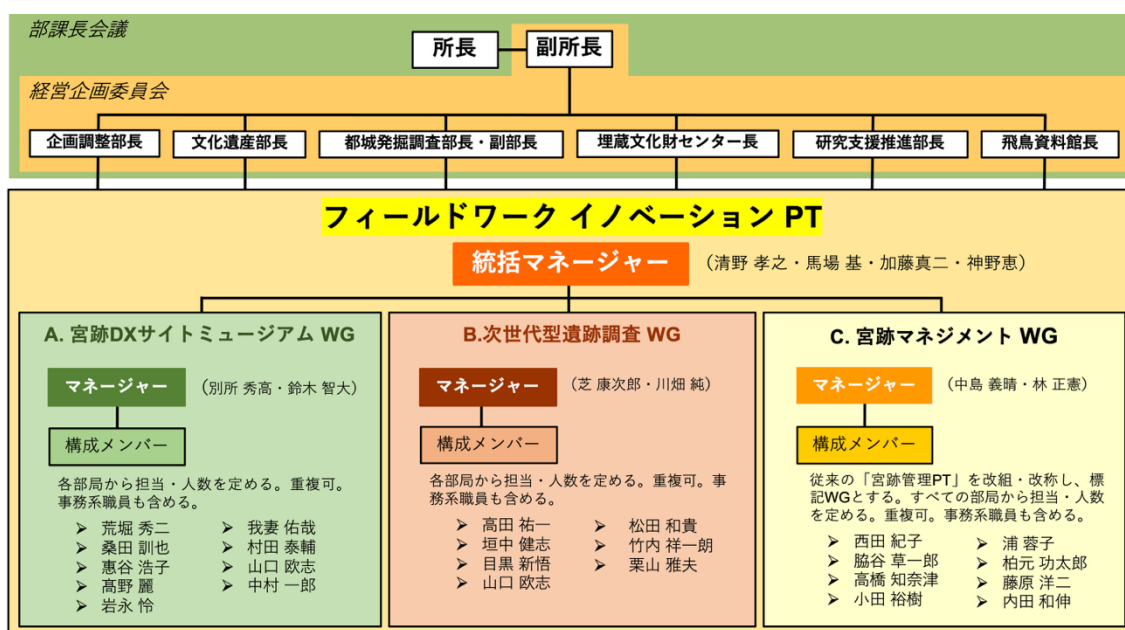
ストラテジーの中核的な重点事業となるフィールドワーク・イノベーション プロジェクト（以下、FwIP）は、「リアル」と「DX」とのシームレスな連続性に注目しつつ、「引き出す：発掘調査方法の見直しと最適化（次世代型調査の提案）」、「見える化：土地履歴 GIS 化による情報取得・管理のシームレス化」、「見（魅）せる：三次元モデル等を併用した新たな遺跡活用・管理」の3つの方向性のもとに、遺跡（史跡）の履歴を明らかにする「次世代型調査」、「宮跡DX サイト・ミュージアム」、「宮跡マネジメント」というフィールドワークに取り組み、そのアウトリーチを次世代型の宮跡サイト・ミュージアムのプランへと反映させるとともに、フィールドワークとアウトリーチで実践した成果を全国の遺跡（史跡）等にモデルとして提供することを目指します（参考資料1 参照）。

このFwIPを実施する過程において、次の3項目を実現します。

- 1) 研究員をはじめ職員一人ひとりの調査研究活動等をいっそう活性化させ、その力を結集することにより、奈文研のこれまでの調査研究を適切に継承・発展させる。

- 2) 研究所における DX の推進、ICT や AI などの最新の科学技術を駆使して調査研究能力・水準の飛躍的な向上と運営の効率化を通じ、奈文研の基盤を充実させる。
- 3) 3 つのワーキンググループからなる所内横断的な体制により、研究所の調査研究を全体として推進する。

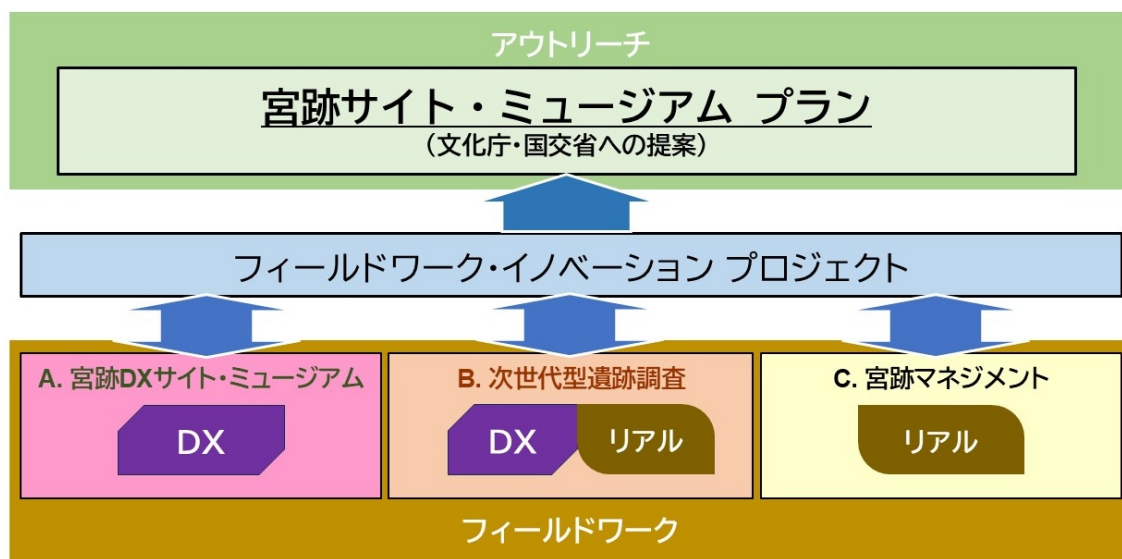
フィールドワーク・イノベーション プロジェクトの実施体制 (PT・WG)



これにより、ヴィジョンに掲げたヘリテージ・サイエンスのナショナルセンターとしての役割を果たすことが可能となります。

第6期中期計画では、FwIP を反映させ、奈文研の役割を「**主に遺跡・建造物・庭園等土地に結び付いた文化財と、そこに伝来した資料に関する調査研究の中核的拠点**」として、「**これら文化財の将来への継承、次世代型の活用・管理ならびに調査の確立と普及のために、調査研究の DX を進めるとともに**」、さまざまな調査研究、調査手法の研究開発、文化財情報基盤の充実と発信を行うこととしています。これにより、FwIP は中期計画に基づく業務の延長線上で遂行されることになり、第6期中期計画に基づく業務自体が、奈文研 PMVS2027 におけるヴィジョンの達成のための戦略へ結びつくこととなります。

また、今回、FwIP の 3 つのフィールドワークについては 5 年、10 年の中・長期的な実施計画（ロードマップ）を、また、第 6 期中期計画で実施する各事業については 5 年の中期的なロードマップをそれぞれ定め、計画的に進めることとしています。これにより、確実に結果を積み上げつつ 5 年後、10 年後の奈文研の姿を目指します



フィールドワーク・イノベーション プロジェクトの構造